

巻頭言

地域の歴史再発見

—玉津島と郭家迎陽閣・愛宕山円珠院—

和歌山大学名誉教授

藤本 清二郎



「歴史は再発見されて歴史になる」。禅問答のような話だが、人々は多くの歴史的遺産を見過ごし、放置する。そのため湮滅してしまう。が、誰かが「再発見」し、残そうとさえすれば、文化的歴史的財産は残りうる。和歌山には再発見された、地域にとって宝というべき歴史（歴史遺産）が多くある。「歴史再発見」について若干述べよう。

「和歌の浦」は「歴史再発見」が積み重ねられてきた。20世紀末、和歌浦地区は住宅地となり、「和歌の浦」という歴史・文化はほとんど忘れられていた。さかのぼれば、和歌浦の地は古代国家にとって瀬戸内海—朝鮮半島への交通上の要地であった。724年（神亀元年）聖武天皇行幸が記録され、歴史書にその名を残すこととなった。そして和歌と結びついて、11世紀、都人の間であこがれの地となった（村瀬憲夫他編著『和歌の浦の誕生—古典文学と玉津島社—』〈清文堂、2016年〉）。これは天皇・貴族による歴史の再発見である。

近世になると秀吉・浅野幸長・徳川頼宣らの武家領主が「和歌の浦」を再発見し、政権の基盤に位置づけた。秀吉は城郭の設置と共に「和

歌山」の名を生み出した。浅野氏は雑賀山に天満宮を拡張し、徳川氏は東照宮を新設して、紀伊半島の政治拠点と歌山に「和歌の浦」を結びつけた。明治以降「和歌の浦」を支えたのは自治体、民衆であった。観海閣はそのお陰で何度か再建され、現在に至る。

今、「和歌の浦」は国の名勝、県の史跡・名勝に指定され、日本遺産となった。そのきっかけは80年代末のある道路計画であった。ここで伝えたいのは、今年の再発見である。和歌浦地区の地形図に記された海拔2メートルの等高線を取り出してみると古代の地形が浮き彫りになった。地図と玉津島神社の古文書の解読等を通じて、得られた成果を『和歌の浦・玉津島の歴史—その景観・文化と政治—』〈和泉書院、2019年〉に書いた。「玉津島」は岬の先にある島山を指し、同地名は聖武行幸以前から存在し、地域の人々（紀氏や海民・民衆）にとっての聖地であったことなどを発見した（同書に詳説）。和歌浦では今も歴史の再発見が続けられている。

ついで、最近の興味深い歴史再発見二例を紹介しておきたい。一つは和歌山市内今福にある

擬洋風建築の郭家「迎陽閣」である。この建物は1877年（明治10）に7代目郭百輔によって建築されたことが明らかとなっている。郭家の初代玄関は江戸時代初期に明国から長崎に渡来し、医業に従事し、3代目米虫が18世前半期に紀州へきて、城下郊外光明寺（塩屋村）に住まいした。4代目延雪が紀州徳川藩へ仕官し、1798年（寛政10）に「御匙医（おさじい）格」へ昇進し、その頃今福の地に居を構えた。

ここまでの話であれば多数の紀州藩御殿医の歴史に留まるが、郭百輔は幕末期に漢方医から蘭方医に転じ、明治初期に新政府の軍医を経て、和歌山県近代医学の祖となったことが注目される。1874年（明治7）和歌山医学校・病院設立を提唱し、開校後医官となるが、同時に今福の地で民間医として診療所を開業した。この診療所の建物は西洋風の玄関・柱・二階テラスを持つ擬洋風建築で、「迎陽閣」と名付けられた。この名は、建物が東向きであることを表現しているが、あたかも近代医学の光が建物に差し込むかのようなのである。

有名な開智学校（松本市）は1876年（明治9）であるからそれに続く早い時期のものであり、個人医院であるという特徴がある。建造物の価値は当然全国的に注目されるが、和歌山県の近代医学出発に郭百輔が深く関わったことが重要であり、その個人医療施設は城下郊外の今福に今も辛うじて残されている。また8代目郭嘉四郎は日本初の医学史『皇国医事沿革小史』を著わしている。和歌山の近代医学史では必ず触れねばならない人、建物である。この歴史の再発見、文化財・歴史遺産の保護活用は、全国の建築学界、医学界に注目され、観光にも寄与し、やがて新しい歴史を迎えるであろう。

もう一つは和歌山市内（現秋葉町、元和歌村の北端）、愛宕山麓の円珠院の再発見である。円珠院は愛宕山上にあった愛宕大権現社の別当寺院で同山南麓にある。和歌浦雲蓋院（東照宮の別当寺院）末の紀州徳川家ゆかりの天台宗寺

院である。境内地は国道42号線、水軒口交差点より少し東、道路北側にある。江戸期ここは横U字形に奥まり、山の東向こうは塩屋村であった。境内地の入口に愛宕山への登山道があった（『紀伊国名所図会』）。

愛宕社は、初代藩主徳川頼宣によって1622年（元和8）に京都の愛宕山から勧請された。その後、とくに8代目重倫、10代目治宝の庇護を受けて運営されたと伝えられていたが、このほど円珠院の古文書を調査したところ色々なことが分かってきた。例えば1831年頃、西浜御殿居住の隠居藩主治宝から支援を受け、山上愛宕社・山下円珠院は修復され、円珠院は明治以降にも続いた。藩主からの支援はもとより、円珠院は城下の家々に支えられていた。愛宕社は「火の用心」の神であり、城下の防火のために設置された。円珠院は祈祷を行い、火災除けのお札を配った。近代、徳川家の支援がなくなって以降、市民への火除け配札・布施と、市内の名望家・文化人の寄附に支えられた。円珠院は文化人の常に出入りするサロンでもあった。南方熊楠・常楠兄弟も支援者であり、熊楠は英国から帰国後暫く円珠院で過ごした。

明治維新後、1874年（明治7）愛宕山は政府に収公され、1939年（昭和14）に円珠院の境内地を縦断し、東方の塩屋村に通じる山越道が開削された。数年前にまた、片側2車線30M幅の自動車が拡幅されて、境内地は道路北側に僅かに残るのみとなった。明治以降、上^あ地と道路設置のため徐々に狭くなり痛ましいが、信仰・文化はなお保たれている。残る内仏の間には、江戸期の建築様式が伝わる。和歌浦の北辺山上から城下町の火の用心を守護する神社・寺院が、江戸時代たしかに存在した。この歴史は今再発見され、その保護の歴史が始まろうとしている。